

1 昨年度の授業改善推進プランの検証

(1) 成果

- ・簡単な実験器具の正しい使い方や実験手順を理解し、意欲的に観察・実験に取り組むことができた。

(2) 課題

- ・問題を正しく読み取る力が弱い。(何を問われているのか相手や問題の主訴を正しく認識する活動を国語や普段の学習を通して行う)
- ・資料や結果を元にしてそこから考えられることを推測する力を培う必要がある。(まず、分かったことをまとめたり、理由を説明したりできるようにしていく)
- ・課題に対して自分なりの予想を立てさせ、その予想を基に見通しをもって実験に取り組ませる必要がある。
- ・引き続き、実験結果を基に課題に対して分かったことや気付いたことを考察にまとめる活動を継続する必要がある。

2 大田区学習効果測定の結果分析

(1) 達成率(経年比較)

	令和7年度結果	令和6年度結果	令和5年度結果
第4学年	正答率は目標値を13.0ポイント下回った。		
第5学年	目標値を1.3ポイント下回った。達成率は13.1ポイント上回った。	目標値を9.4ポイント下回った。	
第6学年	目標値を8.9ポイント下回った。達成率19.5ポイント下回った。	目標値を9.9ポイント下回った。達成率は2.0ポイント上回った。 (令和7年度:6年生が5年生時)	目標値を7.9ポイント下回った。 (令和7年度:6年生が4年生時) 達成率比較データなし 3年時は理科調査未実施のため

※正答率は、本年度東京書籍が設定した目標との比較。達成率は本校前年度との比較を示す。

※各学年の数値は同一集団の経年変化を示す。(例 令和6年度の6年生欄は令和7年度の6年生の5年生時)

(2) 分析(観点別)

① 中学年(4年生のみ)

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
目標値を14.0ポイント下回った。昆虫の育ち方や体のつくりについての知識が身に付いていない児童が多い。	目標値を11.7ポイント下回った。実験の結果から、磁石の極や電気の回路について説明できる児童が少ない。	自然の事物・現象に興味をもち、すすんで学習を進めることはできている。他者と関わりながら問題解決しようとする態度は見られるが、既習事項を生かして考えようとする態度があまり見られない。

② 高学年

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
5年生は目標値を0.1ポイント下回った。サクラやカエルの成長、水の体積変化など、事実内容の定着が弱い児童がいる。 6年生は目標値を8.1ポイント下回った。器具の使い方の正	5年生は目標値を3.2ポイント下回った。既知の知識から新たなことを推測したり、事実に基づいて説明したりすることに課題がある。 6年生は目標値を10.1ポイント	学んだことを学習や生活に積極的に生かそうとする児童は少ない。

答率は目標値に達しているが、「子葉」や「水溶液」等の理科用語が定着していない児童が多い。	下回った。問題に示された実験方法の正誤を判断し、その理由を文章で説明することができる児童が少ない。	
--	---	--

3 授業改善のポイント（観点別）

（1）中学年

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
実感を伴った理解になるよう、教科書を追試するのではなく、児童が自らの興味関心に基づいた観察・実験を体験的に取り組む。 器具や機器などを正しく扱いながら調べる。観察については、視点や方法を3年生で習得させて4年生で活用できるようにしていく。	学習問題・予想・観察・実験・結果・考察といった学習手順を理解させる。観察・実験の結果から分かったことを、提示されたキーワードで自分なりにまとめ、表現させる。 児童の ICT 機器の活用技能を高め、写真や動画を活用して、考えをまとめることができるようにする。	植物の栽培や昆虫の飼育を行い、実体験を通して自然を愛する心情を育てる。観察したり、調べたりすることにより生命の神秘や連続性に気付くようにさせ、意欲関心を喚起する。 日常生活の知識・体験を学習内容に生かすことができるように、児童の身近である教材・教具の工夫を図る。

（2）高学年

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
自然の事象・現象について、実際に観察してその様子や変化を調べる活動を通し、実感を伴った理解になるように学習を構成する。また、中学校、高校を見据えて、正しく科学的用語を使えるようにする。 「星」の学習については夜間になるため学校での実際の観察が難しい。そのため ICT を活用することで、知識の定着を図る。 見通しをもって観察・実験に取り組ませるために、実験器具の正しい使い方や実験手順を十分に理解させる。	観察・実験などの体験活動を充実する。課題に対して自分なりの予想を立てさせ、その予想を基に実験方法を考えて実験に取り組ませる。また、結果から考察する活動を確実に行わせ、分かったことや残っている課題、新たな課題を意識させる。 学習問題・予想・見通し・観察・実験・結果・考察・結論・感想といった一通りの手順で学習を進め、観察・実験の結果から分かったことを、自分なりにまとめ、表現させる。 児童の ICT 機器の活用技能を高め、思考ツールや写真や動画を活用し、考えをまとめることができるようにする。	「星」の学習については、実際の観察を通して興味関心の喚起を図る。従来、星座早見盤を活用して星を探していたが、現状ではスマートホンやタブレットで AR を活用することで実際の空にあたかも星座があるように見せることができる。ほかの場面でも ICT を効率的に生かすことで、実用感をもった学習活動にしていく。 見通しをもたせる活動を系統的に続けることで科学的見方を育て、有用性を実感できるようにする。